

ルカ 16 : 19-31

今日のイエスさまのお話は、一度聴いたら忘れることが出来ない不気味さを秘めています。そのことに気づいている私たちは、聖書の中のこのイエスさまのお話だけは、あまり読み返したいとは思わないのが正直なところかもしれません。このお話には、私たちの良心を刺す棘のようなものを感じずにはいられないからです。「福音」が喜ばしいメッセージという意味であるなら、どうしてこのようなイエスさまのお話が福音と言えるのでしょうか。

今日のイエスさまのお話は、この世の生活と死後の陰府の世界の二つの場面から構成されており、その中で場面が変わると、二人の登場人物の運命は全く逆転しています。ラザロのような境遇を生きざるをえない多くの人々にとって、イエスさまのこのお話は、どのように響くのでしょうか。ラザロにとっては、この世の生活を生きるかぎり、状況は何一つ変わることはないのです。彼に与えられる唯一の慰めはイエス様が語られた死後の世界への希望の中にしかないのです。金持ちの家の門前で、誰にも顧みられることなく、見捨てられた人として生涯を終えたラザロにとって、イエスさまのこのお話は彼の生きる力を支える福音となったのでしょうか。

他方、死んで陰府の世界に落ちた金持ちにとっての死後の世界は全く絶望的です。彼の願いはもはや何一つ聞き届けられることはなく、どんなに願ったとしても、陰府に落ちてはじめて気づいた、自分の生き方をやり直すことはできないのです。この結末は、私たちにはあまりにも陰惨なものであり、そのようなことを考えると、言いようない恐怖しか感じられないと言わざるをえません。私たちがこのように感じるとするなら、イエスさまの今日のお話には、それだけの迫力があるからです。その迫力に圧倒されつつも、イエスさまがこのお話によって何を語ろうとしておられるのか、なおも耳を傾けなければなりません。

陰府に落ちた金持ちが見上げると、天の宴席に着いているアブラハムとその側にいるラザロが見えたと言われています。金持ちは陰府の底からアブラハムに向かって父よと呼びかけます。その叫びに対してアブラハムも「子よ」と応じていますが、金持ちはもはや、アブラハムにすぎることは出来ないのです。

「私たちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしても出来ないし、そこからわたしたちの方に越えてくることも出来ない」。

陰府に落ちた金持ちに対する天の宴席からのアブラハムのこのことばは、イ

イエスキリストが語るこのお話を聞いたユダヤの人々の耳にどのように響いたのでしょうか。彼らは旧約聖書に語られているアブラハムが自分たちの父であることを誇りにしていたのです。中でも、ファリサイ派と呼ばれる人々はイエスキリストが語られたように、死後の世界と死者の復活ということを知っていました。そのような人々に対して、イエスキリストはその人々の信仰と実際の生き方との間に深い亀裂を覗かせている溝を指摘しておられるのです。

「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返るものがあったとしても、その言うことを聞き入れはしないだろう」というアブラハムのことばは、聴いている人々へのイエスキリストご自身のことばです。その人々は、彼らが大切にしているモーセの律法と預言者たちのことばを通して何が命じているかを知っているはずなのです。今日のミサの中で私たちも聴いた預言者アモスのことばや今日歌われた答唱詩篇のことばは、その人々が何度も聴いて口にしていた、聖書のことばであったはずですが、けれども、イエスキリストの目に映る人々の姿は、アモスが語った時と全く変わってはいないのです。今日のイエスキリストのお話の言いようのない暗さと不気味さは、そのような人々の姿を目にされた深い嘆きから発せられているのです。

あのとき、イエスキリストがユダヤの人々に語られ、今日私たちが聴いたイエスキリストのおことばは、あのときと同じように、今日私たちに向けられています。私たちが聖書を知り、イエスキリストを知り、復活のいのちを知った者たちとして、この世界に生きる私たちに神が何を求めておられるかを知っているはずの者たちだからです。

今日のイエスキリストが語られる死後の世界は、私たちにはあまりにも恐ろしく思えます。けれども、わざとこのようなお話をすることによって、イエスキリストはこのようになる前にと私たちにも語りかけておられるのです。目の前にうずくまって、ものも言えずにいるラザロに目を留めるべきではないかと語りかけておられるのです。

イエスキリストの今日のお話は確かに、私たちにはあまりにも暗く、不気味すぎて、直ちに喜びをもって受け入れることは難しいかもしれません。

けれども、イエスキリストの福音はその全てが、私たちがそれを聞いて心慰められ、励まされる神さまの大いなる憐れみの愛による救いの約束を語るだけではありません。むしろ、今日私たちが聴いたように、私たちのありようを問いただし、回心を促すおことばでもあるのです。それらのおことばが私たちにとって、真の福音となるのは、私たちがイエスキリストのおことばを受けとめることによって、自分自身のありようを変えることができたときです。つまり、イエスキリストのおことばに従って回心することが出来た先に、私たちはイエスキリストのお

ことばが、私たちにとっての真の福音であることを悟ることが出来るのです。そのような意味でイエスさまの福音は常に、私たちへの問いかけであり、真の幸福への招きです。私たちにとって信仰とは、イエスさまがそのおことばをもって私たちに呼びかけておられる真の幸福への招きに気づき、それを受け入れて行くということです。

ラザロのような状況を生きざるをえない時、私たちには、イエスさまが語られた、この世の生の彼方においてラザロを待っている、アブラハムとともに味わう天の宴席の喜びを信じて、この世のむごい現実を生き抜く力を得て行くことが求められています。ラザロのような境遇の中で、イエスさまがラザロに保証してくださった喜びを信じて生きるということは並大抵のことではありません。しかし、それが十字架の死を超えて復活されたイエスさまの私たちに対する信仰の招きなのです。

私たちの現実の生活は、イエスさまのお話の金持ちの暮らしぶりとはほど遠いものです。ぎりぎりの生活と将来の不安の中で、それでも多少のゆとりができれば、少しの贅沢は家族のためにも許されるのではないかというようところで多くの私たちは、つつましく生きているのが現状かもしれません。今の社会に生きる私たちはそのような幸せを求めて生きています。けれども、そのような私たちにも、このお話を通してイエスさまが求めておられることに変わりはありません。この地球上に、ともに生きるより貧しい人々への心配りを忘れ、自分たちの幸せだけを願って、それを脅かす生活不安だけに心を奪われるとき、この地上には、今日イエスさまが語られたラザロとあの金持ちを隔てる絶望的な溝が広がってゆくのです。今、私たちが回心しなければ、私たちの世界はお互いの間に溝を深めるだけの、それゆえ、あの金持ちが陰府の世界で直面することになったような、神が望まれる世界とはほど遠い、救いのない世界に落ち込んで行くしかないこととなります。このことの中に、今日のイエスさまのお話の、今の私たちの世界に対する警鐘を聴き取るべきかもしれません。そのイエスさまの告げる警鐘に心に向け、イエスさまの求めておられる私たちの生き方の転換がなされる時、今の私たちの世界を分断する、持てる者たちと持たざる者たちとの間の、不気味な壁が乗り越えられ、真の平和への道が開かれることになるのではないのでしょうか。イエスさまの今日のおことばを、私たちの世界とそこに生きる私たち一人ひとりを、そのような真の人間同士の関わりが実現する世界へと導こうとされているイエスさまの福音として受け止めて行きたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高